

レプリコンワクチン中止等の意見書の提出を求める請願

令和6年9月10日

紹介議員 寺長根 浩

請願第 14 号



令和 6 年9月 10 日

盛岡市議会議員 遠藤政幸 様

請願者

住所 岩手県盛岡市

氏名 盛岡を支える市民の会 牧一洋

電話



レプリコンワクチン中止等の意見書の提出を求める請願

新型コロナウイルスの蔓延により、令和3年2月から国内で開始した新型コロナワクチン接種は、海外では早い段階で中止されたにも関わらず、日本では接種回数が7回に及ぶまで続けられた。しかしながら、新規感染者数は減少するどころか増加し、令和3年から日本の死亡者数の増加は高齢化では説明がつかない現状である。

令和6年10月から新型コロナウイルス感染症の予防接種が定期接種となり、使用されるワクチンは、組み換えタンパクワクチン(不活化ワクチンの一種)、mRNA ワクチン、sa-mRNA ワクチン(自己増殖型 mRNA ワクチン)の中から選択される予定である。この中で組み換えタンパクワクチンは従来の技術を用いており、人への健康被害は比較的少ないことが確認されているが、mRNA ワクチンに関しては令和3年にワクチン接種開始してから、副反応疑い報告数や予防接種救済制度の認定件数が過去に類をみない現状である。その mRNA ワクチンの更なる新技術を使用した自己増殖型 mRNA ワクチンにおいては、体内でスパイクタンパク質を生成する設計図となる mRNA が人の体内で増殖し、少量の薬剤で高い中和抗体価が得られるというものである。実際、製薬企業の試験では、マウスにおいて初回接種として摂取した場合、従来のワクチンに比べ、中和抗体価が約 47 倍高い結果が出ている。しかし、中和抗体価が高いということは、ワクチンによる免疫異常等の健康被害の可能性も高くなるということである。また、mRNA が自己増殖することにより、細胞内の物質が過多となり、細胞から細胞へと情報伝達をする役割を行っている、直径 30~150nm 程度の小胞であるエクソソームによって、唾液や血液、汗、尿を介し、mRNA やスパイクタンパク質等が体外へ排出され、ヒトからヒトへ伝播する可能性が否定できないという見方もある。

新型コロナウイルスは RNA ウイルスであり、ウイルスの変異が早いため、ワクチンで選択するウイルス株も実際のウイルスの変異に追いついていない現状がある。新型コロナウイルス感染症対策として使用されている mRNA ワクチンでさえ安全性に対する懸念が拭えない中、さらに新技術の自己増殖型というワクチンに対し、免疫系への中長期的な影響や、将来的な健康リスクについての科学的データが不足している現状から、慎重な判断が求められる。

よって、市民の命と健康を守るために、下記の事項について、地方自治法第99条の規定による意見書を国に対して提出するよう請願する。

記

1. 安全性が承認されていない 自己増殖型 mRNA ワクチン(レプリコンワクチン)を含む、mRNA ワクチンの国民への接種を中止すること。
2. 国民へ mRNA ワクチンによる健康被害状況を周知すること。
3. mRNA ワクチンで生じた健康被害の救済強化をすること。

以上、地方自治法第124条の規定により請願書を提出する。

ワクチンの違いについて

mRNAワクチン

- ・臨床試験が終了しないまま「特例承認」の形で接種開始
- ・ウイルスを構成するタンパク質の遺伝情報（設計図）の一部を使ったもの
- ・新型コロナウイルスワクチンで世界で初めて実用化
- ・人類に初めて使用されたmRNA-LNP脂質ナノ粒子製剤である遺伝子製剤である
- ・mRNAを包む脂質ナノ粒子（LNP）は、血流に乗って全身に運ばれ、LNP自体が炎症を誘導、細胞が壊される可能性
- ・スパイクタンパク質自体が毒性が強く、血栓が出来やすくなる
- ・スパイクタンパク質を発現した細胞が自分自身の免疫細胞に攻撃され自己免疫疾患を起こす可能性がある
- ・mRNA型ワクチンを打つ回数が多いほど、免疫を抑制する抗体IgG4が誘導され免疫の働きが乱され免疫低下によるIgG4関連疾患などが発症しやすい
- ・DNA または mRNA でコロナウイルスのスパイクタンパク質を産生させ、抗原刺激する新規遺伝子ワクチンである
- ・免疫システムがCOVID-19を認識し、体内の細胞に特定のスパイクタンパク質を産生するよう指示、免疫応答を刺激し将来の感染を認識して闘える設計図を残す
- ・本来、ワクチンに入ってはいけないワクチン由来のDNAが基準値を上回るワクチン由来のDNA（SV40プロモーターやエンハンサー含む）が混入していたことが判明している
- ・他国では、人体に及ぼす健康被害が指摘され接種を早い段階で控えたが、日本は7回も超える接種を続けている現状

Sa-mRNAワクチン(自己増殖型)

- ・mRNAと同じスパイク・タンパク質をコードする遺伝子に加えて、コピー機の役割を果たす酵素、レプリカーゼをコードするウイルス遺伝子も含む為、制限なしに複製する
- ・体内でmRNAのコピーを作り、ワクチンに含まれるmRNAの相当量よりも多くのタンパク質を産生するが、より長く留まり、持続的な免疫反応を引き起こす可能性がある
- ・少量の薬剤で製薬会社のマウス試験によると、従来ワクチンよりも47倍高い中和抗体価がある
- ・対象株となるJN.1に対し、ヒトでは治験されていない
- ・細胞内の物質過多し細胞から細胞へ情報を伝えるエクソソームにより唾液、血液、汗、尿を介しヒトからヒトへと伝播する可能性
- ・ベトナムで被験者1万6千人の有効性試験を実施したが、ベトナムでは承認されていない。世界では、日本が初となる

副反応論文一覧：<http://www.mcl-corp.jp/meditrans/review-articles/>

参考チラシ：https://hello.matrix.jp/stop_mrna/Download/stop-repliconvaccines-chirash-omote-print.pdf

mRNAワクチンの危険性：<https://stop-mrna.com/mRNA>

生ワクチン

- ・生きたウイルスや細菌の病原性（毒性）を症状が出ないように極力抑えて、免疫が作れるぎりぎりまで病気になる性質を弱めた製剤
- ・自然感染と同じ流れで免疫ができるので1回の接種で免疫ができる
- ・自然感染よりも免疫力が弱い為、5－10年後に追加接種必要
- ・接種後、ウイルスや細菌が増えるので、発熱や発疹などその感染症にかかった症状が軽く生じることがある

（例）麻疹、風疹、水ぼうそう、BCG、おたふくかぜワクチン

不活化ワクチン

- ・ウイルスや細菌の毒性を完全になくし、感染する力を失わせたもの
- ・免疫をつくるのに必要な成分だけを製剤
- ・生ワクチンのように体内でウイルスや細菌が増えることはない
- ・1回の接種では十分な免疫ができないため、複数回の接種を受ける必要がある

（例）インフルエンザ、日本脳炎、肺炎球菌ワクチン

トキソイド

- ・感染症によっては細菌の出す毒素が、免疫をつくるのに重要なものもあるため、病原体がつくる毒素（トキシン）の毒性をなくして免疫をつける力だけを残したもの
- ・不活化ワクチンに分類されることもある

（例）ジフテリア、破傷風ワクチン

組み替えタンパクワクチン

- ・病原体のタンパク質からつくられたもの
- ・生ワクチンや不活化ワクチンとは違い、ウイルスそのものは使用しない
- ・複数回の接種が必要

（例）ヒトパピローマウイルス、B型肺炎、带状疱疹ワクチン

ウイルスベクターワクチン

- ・ウイルスのタンパク質のもとになる遺伝情報（設計図）として、Sタンパク質のDNAを合成し毒性、病気になる性質のないウイルスに組み込んだもの
- ・日本では新型コロナワクチンで初めて使われたもの

（例）新型コロナウイルス

日本で接種可能なワクチン：<https://www.niid.go.jp/niid/ja/vaccine-j/249-vaccine/589-atpcs003.html>

ワクチンの種類：<https://www.sumitomo-pharma.co.jp/sukoyaka/medicine/medicineworks/article15/>

ワクチンの種類：
<https://www.hosp.ncgm.go.jp/isc/080/FY2022/03.pdf>

エクソソームによるヒトからヒトへの伝播について

エクソソームとは

エクソソームとは、細胞から分泌される直径 50~150nm の顆粒状の物質である。その表面には、細胞膜の成分である脂質、タンパク質を含み、内部には核酸（マイクロ RNA、mRNA、DNA など）やタンパク質などの細胞内の物質を含む。エクソソームは細胞外小胞の一種とされている。

エクソソームの形成

エクソソームはエンドサイトーシス（細胞が細胞外の物質を取り込む機能の一種）により細胞内にできたエンドソーム（一重の生体膜からなる小胞）がさらに陥入することで作られた膜小胞が、細胞外に放出されたものである。エクソソームの表面には細胞膜成分が、内部には細胞内の物質が含まれるため、分泌された元の細胞の特徴を反映していると考えられている。

エクソソームの働き

細胞から分泌されたエクソソームは細胞と細胞の間に存在するだけでなく、体液（血液、髄液、尿など）にも存在しており、体中を循環している。エクソソームの重要な機能として注目されているのは、細胞間の情報伝達に使用されているということである。エクソソームはその内膜に核酸、タンパク質などを含んでいるが、分泌した細胞の核酸（マイクロ RNA、mRNA）がエクソソームを介して受け取り側の細胞に伝達され、機能していることが報告されている。このことからエクソソームは細胞間のコミュニケーションツールとして働いていると考えられる。最近では悪性度の高いがん細胞から放出されたエクソソームが悪性度の低い細胞に働きかけ、その細胞の性質を変化させることが証明されている。そして、再生医療の分野では、アンチエイジング等にも用いられている。

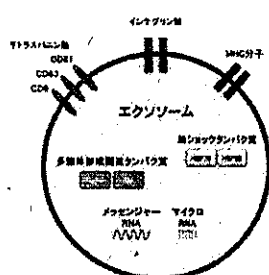


図1. エクソソームは由来する細胞の特徴を反映していると考えられる

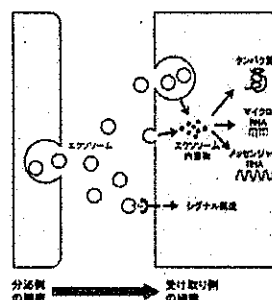


図2. エクソソームは細胞間のコミュニケーションに使われる

自己増殖型 mRNA ワクチンとエクソソーム

この度のワクチンは細胞内に取り込まれた mRNA が複製を繰り返し、さらにその mRNA がスパイクたんぱく質を生成する。そのため、細胞内が飽和状態となる。以前エクソソームは余分な細胞内の物質を排出するためのものだと考えられていた程、内容物過多となった細胞はエクソソームで細胞内の物質を排出しやすい傾向がある。そのエクソソームは体液等で体外に排出されることも確認されている。自然界の例ではマツの木に寄生するマツノマダラカミキリムシの染色体からマツの木のゲノムが見つかり、個体間の情報伝達も示唆されている。よって、体外に排出されたエクソソームより、ワクチンの mRNA や mRNA によって生成されたスパイクタンパク質がヒトからヒトへ伝達される可能性が否定できないと言われている。